

サロン九条 第 325 回例会 (2019. 2. 12)

テーマ：「漢字の成り立ち・白川文字学を楽しむ」

話題提供：島田幹夫（京大名誉教授・白川文字学漢字教育士） 参加者 25 名

サロン九条の例会では、昨今の社会的な話題の提供が多い中で、今回は、「白川文字学漢字教育士」というユニークな立場で漢字を題材とした学習活動を進めておられる島田幹夫さん（京大名誉教授）から、「漢字の成り立ち」のその面白さを中心に、今日に通じるその背景を解いていただきました。

島田さんは、今の学生について、意外に漢字が読めなく、それが小学生にまで遡り、そこからしっかりと覚えられていないということを指摘され、約 3, 300 年前の古代中国で生まれ展開した全体像を捉える必要があるとの問題提起をされました。

はじめに島田さんは、自身と「白川文字学」との出会いについて、それが 20 数年前の朝日新聞での紹介記事であったことに触れられました。

そこでは「自分の主張を訴える文章である」＝「檄文」の『檄』という漢字が『木』・『白』・『方』・『夂』の各部に分解され、それぞれの甲骨文字の意味から成り立ち、絵のように再現できて、それが、『吊るした白い骸骨(=死体)を神官が棒で叩き、霊を呼び起こして木札に乗り移す』様を表し、全体として『筆で木札に叶い事を伝える』との呪能的な意味があったことに驚かれたそうでした。

そうした契機で学ばれた「白川文字学」でしたが、その確立に貢献した「白川静博士」の紹介に話は移りました。

白川先生は、1910 年(明治 43 年)福井県の生まれで、尋常小学校卒業後に大阪に出て、政治家の事務所の書生として住み込み、そこで多くの書物を読まれたとのこと。その後 1933 年に立命館大学専門部(夜間)に進学され、卒業後は立命館大付属の中学教師をされた後、立命館大学の教員をしながら、中国・殷時代の古代文字で漢字の原初形態と言われる「甲骨文字」の解読と解釈研究に専念され、51 才の時に「興(きょう)の研究」で京都大学から文学博士の学位を授与されました。そして 70 才を超えてから「甲骨文・金文」の体系的読解と解釈を基礎に字源辞典として「字統」「字訓」「字通」の三部作を大成されたとのことでした。

島田さんは、白川先生が福井県生まれであることについて、福井県の小中学生の学力の高さは、漢字教育の違いによる理解力の高さがあるのではないかと指摘されました。

さらに、今回の話題提供の中心となる白川文字学のポイントについて、「白川先生の最大の発見は、「サイ(口)」の提唱にある」とされました。古代中国・殷の時代における戦いは、まず呪術による攻防として行われ、その呪術的な戦いは言葉により展開したため、その呪的な機能を定着し、永久化するために、「サイ(口=箱・器)」という原初的な文字が作られ、それは「人が神様に願い事をするために書いた文(=祝詞)を入れる器(入れ物)を表した文字と考えられる」と解説されました。

また、この「サイ(口=箱・器)」は、神様と関係がある漢字として、「右」「兄」「合」「言」など多くに見られることも加えられました。

終盤では、人の形に関係する古代文字のいくつかを現代の文字に直すテスト問題を提供され、参加者の関心を誘われました。

その後の参加者意見交流では、「漢字のみを使う中国では、字を簡略化しているが、本来の意味が失われているのではないか。」「今で百歳になる父親の漢字辞典には、奥深さを感じる」「今の漢字検定にも白川理論が見られる」「国字と言われる日本独自の漢字も見られる」等の意見がありました。

最後に、島田さんは、「“サイ(口=箱・器)”の発見は、漢字の発生が持つ意味(=背景)を知ろうと核となるものであり、占いと交通手段としての“サイ(口=箱・器)”からの漢字のスタートであった。」とされたことは、私たちにも、漢字という人的交通ツールが現代に意味するものを考えさせるものとなりました。